

令和4年度文化財巡回企画展

# 鎌倉殿の御家人

# 「八田知家」とつくば

かまくらど の の ご け に ん は た た と も い え と つ く ば

## I. 巡回企画展

期間 令和4年9月17日(土)～令和5年2月1日(水)

時間 9:00～16:30

休催日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日)、  
祝日の翌日(土曜日及び日曜日を除く)。12月28日～1月4日。

会場1 小田城跡歴史ひろば案内所

令和4年9月17日(土)～令和4年11月20日(日)

会場2 谷田部郷土資料館(谷田部交流センター3階)

令和4年11月26日(土)～令和5年2月1日(水)



## II. 小田氏の本拠、小田をめぐる

日時 令和4年11月19日(土) 9:30～12:00

雨天の場合20日(日)に順延

集合 小田城跡歴史ひろば案内所

定員 30名程度(15名×2班)(市内在住・在勤・在学者が対象、  
事前申込制、応募者多数の場合は抽選)

内容 小田地区の史跡や文化財等を専門員の解説を聞きながら巡る。

応募 10月21日(金)までに、つくば市公式ウェブサイトからいばらき電子  
申請による申し込み、又は往復はがきに、住所・氏名・年齢・電話番号・  
「ウォーキング希望」と記入し、つくば市文化財課宛てに郵送(当日  
消印有効)。



入場・参加無料

上：松樹千鳥鏡(刈間神田遺跡)

下：永福寺同範瓦(三村山極楽寺跡表採)

## III. 講演会「鎌倉殿」と御家人八田知家

日時 令和4年11月27日(日)

14:00～16:00 (13:30開場)

講師 糸賀 茂男氏 (土浦市立博物館館長、上高津貝塚ふるさと歴史の  
広場考古資料館館長、常磐大学名誉教授)

会場 つくば市役所会議室201

定員 約120名(事前申込制、応募者多数の場合は抽選)。後日、  
講演会の動画を期間限定でネット配信予定。

応募 10月28日(金)までに、つくば市公式ウェブサイトからいばらき電子  
申請による申し込み、又は往復はがきに、住所・氏名・年齢・電話  
番号・「講演会希望」と記入し、つくば市文化財課宛てに郵送(当日  
消印有効)。

共催 NPO法人スマイル・ステーション

『誰でも学生・誰でも先生・誰でも学長・何処でも教室「楽楽大学」』

問合せ つくば市教育局文化財課

〒305-8555 つくば市研究学園一丁目1番地1

☎029-883-1111(代表)

<http://www.city.tsukuba.lg.jp>



歴史・文化財

### 新型コロナウイルス感染症対策について

※新型コロナウイルス感染症の状況により、内容の変更や中止となる場合があります。詳しくは市公式ウェブサイトをご覧ください。

- ・体調不良が明らかの方の入館はお断りすることがあります。
- ・来館時にはマスク着用をお願いします。
- ・詳細は市公式ウェブサイト掲載の文化財展示施設利用ガイドラインを御参照ください。

# 1「京都に馴れるの輩」八田知家

はったともい え ひたちおだ  
八田知家は、常陸小田氏(以後小田氏とする)の祖とされ、常陸国(茨城県)南部で最大の勢力を誇った小田氏の礎を築いた人物です。知家の兄である八田朝綱は下野国(栃木県)へ進出し宇都宮氏を名乗り、知家は常陸国へ進出し小田氏の祖になりました。この八田知家について、幕府の編纂物である『吾妻鏡』(以後『吾』と略す)の記述を中心に、その人物像と活躍を紹介していきます。

## ◆謎が多い八田氏

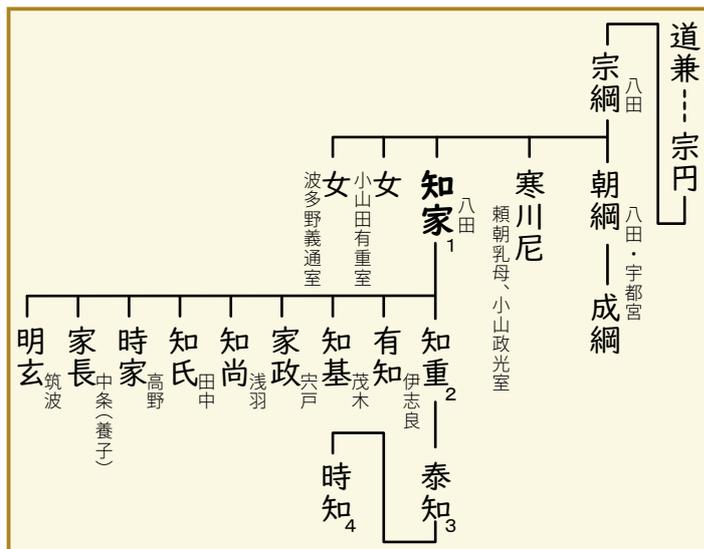
はった ふじわらほつ け う つのみや  
八田氏は藤原北家の流れをくむとされ、宇都宮氏の祖とされる宗円は、前九年の役(1056～62年)に、安部氏調伏祈禱のために源義家(前九年の役であれば頼義、義家であれば後三年の役か)に従い宇都宮に下向したとされますが、詳細は分かりません。2代の宗綱は「故八田武者宗綱」(『吾』)とあることから実在の人物で、上皇を警備する「武者所」に仕えていたと思われます。八田氏の名の地については、一般的には小栗御厨と伊佐郡の間にある「八田」(筑西市)と考えられています。

## ◆京武者であった八田知家

はったともい え  
八田知家は、生年・没年ともはっきりしていません。系図では、康治元年(1142)、3年(1144)2月13日生まれとするもの、建保6年(1218)3月に73、75、76才で没したとするものなどがあります。ただし『吾』では、承久3年(1221)の承久の乱に際し、鎌倉に留まる宿老の一人として登場しています。知家の母は、多氣致幹または小野成任の娘の可能性がありますが、いずれの子であるかははっきりしません。歴史上に初めて登場したのは保元元年(1156)の保元の乱であり、「武者所」の官職や「京都に馴れるの輩」(『吾』)という記述からも、当初の活動は京都が中心であったと思われます。

## ◆「東海道大將軍」八田知家の活躍

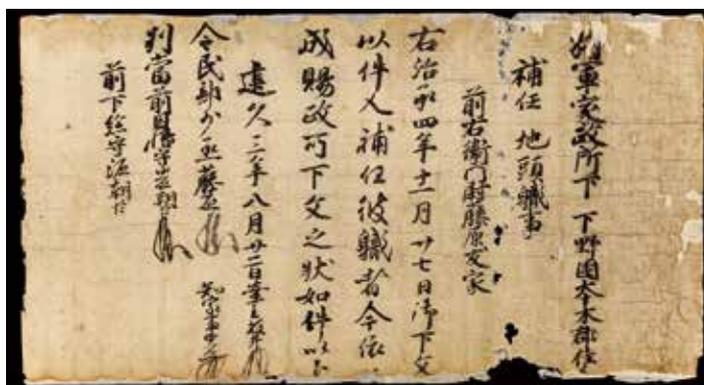
はったともい え じしやう じゆえい うるう のぎのみや しだよしひろ みなものよりとも  
八田知家は、治承5年(1181)(寿永2年(1183)とも)閏2月23日、野木宮合戦(志田義広の乱)で、源頼朝の叔父である志田義広と合戦し、『吾』上ではその後初めて頼朝に謁見しています。平家追討の際には、元暦元年～2年(1184～5)に源範頼に従って豊後国(大分県)に渡り、合戦をしています。また、奥州合戦の際には、文治5年(1189)に下総国(千葉県)の千葉常胤とともに「東海道大將軍」として、それぞれ一族と両国の勇士、「多氣太郎・鹿嶋六郎・真壁六郎等」(『吾』)を率いて、太平洋岸ルートから平泉へ攻め入るなど、数々の戦いで戦功を挙げました。なお、奥州合戦での知家は、常陸国(茨城県)の軍事指揮権をもつことから、事実上の守護職であったとされています。



八田氏・小田氏系図



常陸國小田系図(小田勝太郎氏旧蔵)



鎌倉將軍家(源頼朝)政所下文(○茂木文書)

茂木町教育委員会所蔵 写真提供: 同

- 例言 1. このパンフレットは、令和4年度文化財巡回企画展「鎌倉殿の御家人『八田知家』とつくば」の展示内容を解説するものです。  
2. ◎は重要文化財・国指定史跡、○は県指定文化財、□は市指定文化財を示します。表記のないものはつくば市教育委員会の所蔵です。  
3. 御指導・御協力いただいた方々(敬称略)：系賀茂男、小田中部区会、鎌倉市教育委員会、公益財団法人茨城県教育財団、国立公文書館、宗教法人等覺寺、常総市教育委員会、東京国立博物館、つくば市筑波土地改良区、筑波大学考古学研究室、土浦市立博物館、茂木町教育委員会。

## ◆源頼朝の側近であった八田知家

みなものよりとも  
源頼朝よりやや年長であったと思われる八田知家は、姉である「寒川尼」が頼朝の乳母であった関係もあり、頼朝の信頼が厚かったと思われます。知家の屋敷は、「南御門宅」(『吾』)と呼ばれ、幕府の南門のすぐ近くに屋敷を構えていました。何かあればすぐに駆け付けることができるだけでなく、京都で育った知家は儀礼にも詳しく、重要な客人の接待場所としても頻りに利用されました。また、息子の知重は、頼朝の寝所の警護衆となっており、頼朝との関係の近さが伺えます。



八田知家南御門宅位置図

## ◆源頼朝が寄せる信頼

『吾』によると、建久元年(1190)10月に源頼朝が初めて京都へ出立する際、八田知家は常陸国(茨城県)より遅れて参上しました。頼朝は、病気のため遅れたと言いつける知家を待って、その意見を聞いて陣立てを行いました。また知家は、梶原景時が用意した馬を鎧に合わないとして、自ら馬を献上し、入京に際して使用するよう助言しました。

鎌倉時代後半に成立した仏教説話集の『沙石集』にも知家の話が掲載されています。頼朝が京都へ向かうことを皆が憂いながらも、誰も意見できなかった際に、知家は意見をして頼朝をいさめたとのこと。知家は頼朝に直言できる人物で、頼朝もその意見を採用するなど信頼していたと思われます。

## ◆十三人の合議制

建久10年(1199)4月、源頼朝の死去後、源頼家を支えるため、訴訟の手続きを十三人が行うことが制度化されます。これが「十三人の合議制」といわれるもので、その13人は、北条時政、北条義時、大江広元、三善康信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、安達盛長、足立遠元、梶原景時、二階堂行政です。その構成は文官や将軍の近親者、側近などでしたが、合議制は、実際にはほとんど機能しなかったようです。

八田知家関係年表

和暦	西暦	月日	出来事	年齢
保元元年	1156	7月11日	八田四郎、源義朝方に従軍する	15
治承4年	1180	11月27日	知家、下野国茂木郡の地頭職を得る	39
治承5年	1181	閏2月23日	知家、小山方で野木宮合戦(志田義広の乱)に参戦する ※寿永2年(1183)か	40
治承5年	1181	閏2月28日	知家、鎌倉で頼朝に謁見する ※寿永2年(1183)か	40
治承5年	1181	4月7日	知家息子知重、弓に優れ隔心ないものとして、頼朝の寝所近辺の警護衆に選ばれる	40
元暦元年	1184	6月1日	知家、京都に馴れた輩として、平頼盛の餞別に立ち会う	43
元暦元年~2年	1184~5		知家、平家追討軍の源範頼に従い、九州まで赴く	43
元暦2年	1185	4月15日	知家、勝手に任官したことで、「のろい馬が道草を食う様だ」と頼朝に叱責される	44
文治元年	1185	10月24日	知家、勝長寿院の落慶供養に供奉する	44
文治2年	1186	5月10日	知家、藤原秀衡の貢馬を京都へつなぐ役を命じられる	45
文治3年	1187	1月12日	頼朝・頼家親子、年始めの出行に、知家の南御門宅に入る	46
文治4年	1188	5月20日	知家、家来の庄司頼康が夜番を怠けたことで、頼朝に鎌倉中の道路工事を命じられる	47
文治5年	1189	7月~9月	知家、東海道大將軍として一族や常陸の勇士を率い奥州合戦に参戦する	48
建久元年	1190	10月3日	知家、病気のため常陸国から遅参しながらも、頼朝に上洛の陣容を助言する	49
建久3年	1192	8月22日	知家、將軍家の政所から、再度下野国茂木郡の地頭職の文書を得る	51
建久4年	1193	4月2日	知家、下野国那須野の狩りて千人の勢子を用意する	52
建久4年	1193	5月1日	知家、鹿嶋社の造替遷宮で、多義義幹がなまけていることから交代する	52
建久4年	1193	6月	知家、富士野の巻狩を利用し、多義義幹を失脚させる	52
建久4年	1193	12月13日	知家、北条時政に恨みがあったとして、下妻弘幹をさらし首にする	52
建久6年	1195	1月8日	知家、毛呂季光と養子の中条家長の喧嘩により、出仕が止められる	54
建久6年	1195	5月27日	知家、六所神社に聖観音菩薩御正体を寄進する	54
建久10年	1199	4月12日	知家、源頼家を支える十三人の合議制の一人に選ばれる	58
建仁3年	1203	6月23日	知家、下野国で阿野全成(頼朝異母弟)を誅殺する	62
建永年間	1206~7		知家、極楽寺に銅鐘を寄進する	65
承久3年	1221	5月23日	知家、承久の乱で、宿老として鎌倉にとどまる	80

## 2 常陸平氏から八田氏へ

常陸平氏は、平将門の乱を治めた平貞盛の弟である平繁盛の流れです。貞盛は伊勢国(三重県)に領地を得てその子孫は伊勢平氏となりますが、繁盛は常陸国(茨城県)に残りその大半を治める勢力に成長します。しかし、常陸平氏の本宗であった多気氏は、義幹の代で八田知家の計略により没落し、常陸南部の大半は知家の影響下に置かれることとなります。その状況を現地に残る遺跡とともに見ていきます。

### ◆多気致幹と「東城寺経塚」

常陸平氏の本宗は、本拠地の地名をとって始めは「水漏」(つくば市水守)その後「多気」(つくば市北条)を名乗りました。東城寺(土浦市)の裏山にある東城寺経塚からは、経典を収めた経筒や外容器のほか、鏡、短刀などが出土しています。経筒の銘文には、保安3年(1122)8月18日と、天治元年(1124)11月12日の年号、施主として常陸平氏本宗で多気義幹の祖父にあたる「平致幹」の名前が記されています。致幹の娘が八田宗綱に嫁いでおり、その関係もあって八田氏が常陸国(茨城県)へ進出できたとも考えられています。



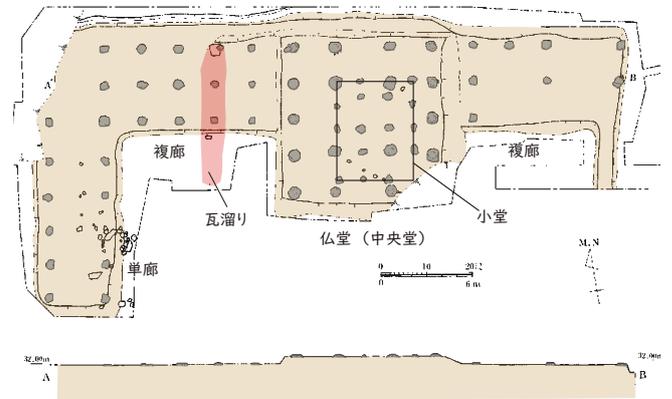
東城寺経塚出土経筒(左:保安三年、右:天治元年銘)  
東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

### ◆建久四年の政変の舞台「多気山城」

建久4年(1193)5月、富士野の巻狩において曾我兄弟の仇討ちが起こり、幕府内は源頼朝の暗殺事件かといいに混乱しました。この際に、八田知家が多気義幹を討つ軍勢を集めていると嘘の噂を自ら流したことで、義幹は「多気山城」(『吾』)に立て籠もりました。6月5日に知家は、義幹に鎌倉への同道を求めますが、義幹はこれを拒否します。知家は頼朝に、義幹に野心ありと讒言して、失脚させました。その後、弟の下妻弘幹も、北条時政に恨みがあったとして知家によってさらし首にされました。これらの事件を「建久四年の政変」と呼び、この後、多気氏の領地であった北郡(石岡市西部)・筑波郡(つくば市北部)・南野荘(つくば市北東部～かすみがうら市)・田中荘(つくば市北部～つくばみらい市)などの常陸国(茨城県)南部一帯を知家が領有したと考えられています。



多気氏の本拠地北条付近文化財等位置図(1:10,000)



□日向廃寺跡平面図(1:500)・出土軒瓦(1:10)  
(『日向遺跡』に一部加筆)

### ◆多気義幹が建立した「日向廃寺跡」

日向廃寺跡は、発掘調査によって見つかった翼廊がある仏堂の跡です。宇治(京都府)の平等院鳳凰堂などに類似した形態や、大量に出土した軒瓦の文様から、12世紀後半頃の建立と考えられています。地元で多気義幹を示す「多気太郎様」と呼ばれている五輪塔が南西側に、「建久四年の政変」時に籠った「多気山城」が背後に、それぞれ位置することから、この付近が多気氏の本拠と考えられます。この寺院跡は、最後の当主であった義幹による建立が想定され、常陸平氏の栄華を物語る遺跡の一つです。

## ◆筑波山南麓への進出

建久4年(1193)に常陸平氏の有力者である多氣義幹や下妻広幹を失脚させた八田知家は、本格的に筑波山南麓への進出を図ったと思われます。そのことを示すものの一つとして、建久6年(1195)に「藤原朝家」が筑波山南麓の六所神社に聖観音菩薩御正体を寄進したことがわかる御正体の写しが残されています。

また、知家の息子たちは各地に領地を得て、勢力を広げていきました。常陸国(茨城県)では、田中荘に田中氏、筑波山中禅寺に筑波氏、小鶴荘(笠間市東部～茨城町)に宍戸氏が、常陸国以外では、下野国(栃木県)に茂木氏、陸奥国(福島県)に高野氏、美濃国(岐阜県)に伊自良氏、越前国(福井県)に浅羽氏等が配されました。



八田知家寄進聖観音菩薩御正体写  
常総市教育委員会所蔵

## 3 八田氏(小田氏)による小田の本拠化

八田知家の本拠地については明確な史料がなく、小田であったとの考えのほか、名字の地とされている八田(筑西市)や、常陸国(茨城県)の中心であった国府(石岡市)に程近い小鶴荘(笠間市東部～茨城町)など、諸説があります。八田氏(小田氏)と小田地区との関係を、考古資料を中心に見ていきます。

### ◆三村山極楽寺と「筑後入道尊念」鐘銘

等覺寺(土浦市)の銅鐘には、「鑄頭極楽寺鐘/奉為…/大将(軍力)…/建永…/筑後入道尊念」の銘文が残されており、筑後入道尊念(知家の法名)により、建永年間(1206～7)にこの鐘が極楽寺に施入されたことがわかります。この極楽寺は、歴史的な状況から小田にあった三村山極楽寺と考えられており、知家の頃には三村山極楽寺があったこと、また知家との関係の深さが伺えます。



左:◎等覺寺銅鐘 等覺寺所蔵  
右:同銘文(部分)

写真提供:土浦市立博物館、株式会社オダギスタジオ・オダギ秀氏撮影

### ◆鎌倉永福寺と同範の瓦と三村山極楽寺

鎌倉の永福寺は、源頼朝が奥州合戦での死者を弔うため、鎌倉に建立した寺院です。永福寺跡で出土した瓦と同じ範型で文様をつけた瓦は、有力御家人の本拠地で確認されることが多く、三村山極楽寺跡でも永福寺と同範の瓦が表面採取されています。また、三村山極楽寺跡は地形から苑池の存在も想定され、13世紀前半に位置づけられる瓦や陶磁器なども出土しています。三村山極楽寺は、八田知家が頼朝の鎌倉永福寺を手本として、極楽往生を願って建立した、浄土庭園のある寺院であったと推測されます。



左上:三村山極楽寺跡小字「神宮」付近空中写真

左下:◎永福寺跡  
写真提供:鎌倉市教育委員会

右上:永福寺同範軒平瓦  
(上・三村山極楽寺跡表採、下・小田城跡)

## ◆小田城跡の鎌倉時代の遺構と遺物

小田城跡の鎌倉時代の状況は、当該年代の遺構面での調査面積が少ないため、詳細は不明です。しかし、戦国時代の整地面等に混ざり12～13世紀前葉頃の陶磁器が出土しています。また、調査面積が少ない鎌倉時代の遺構面では、本丸と軸線方向が異なる石敷きが確認されていることや、本丸外で13世紀中葉頃の素焼きの土器皿(かわらけ)がまとまって出土していることから、鎌倉時代中頃には城館として機能していたと思われます。しかしながら、現在の本丸の原型となる14世紀頃の城館の姿とは、軸線方向や中心位置などが異なる可能性があります。



◎小田城跡調査区位置図(1:4,000)



小田城跡W13トレンチ出土かわらけ

## ◆八田氏(小田氏)の本拠地

八田氏(小田氏)が小田を本拠としたのは、初代の八田知家からであると、4代小田時知からなどの諸説がありますが、少なくとも小田を名乗っていることが確実である4代時知以降の本拠地が小田であったことは異論がないと思われます。小田の地は、国府(石岡市)から筑波山南麓を回り、宇都宮方面へ通じる主要道路の途中にあり、常陸平氏の本拠地多気にも近い場所でした。小田城跡での13世紀前葉の遺物の出土や、極楽往生を願って建立された三村山極楽寺の存在等を考慮するならば、鎌倉の屋敷での活動が中心であった知家も晩年には、小田を本拠とした可能性は十分にあります。

## 4 鎌倉時代のつくば

初代八田知家から7代小田治久(高知)に至る鎌倉時代、小田氏が最も影響を及ぼしたつくばの地はどのような状況だったのでしょうか。発掘調査資料を中心に見ていきます。

## ◆土葬墓・蔵骨器

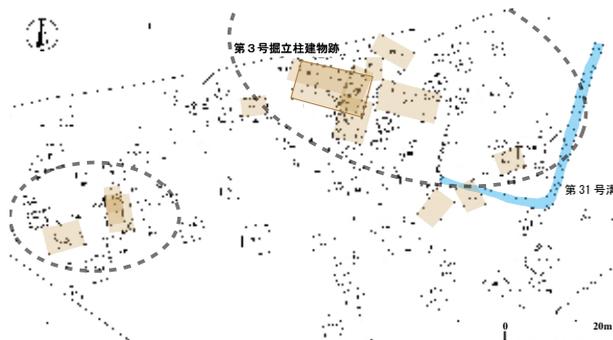
常陸平氏が活躍していた12世紀代について、発掘調査では人々の痕跡がほとんど見つかりません。13世紀以降の痕跡でまず確認できるのが墓です。平安時代の終わり頃から鎌倉時代の前半にかけての、鏡や短刀などが副葬された土葬墓が見つかります。また、同じ頃の火葬骨を入れた蔵骨器も出土するようになります。埋葬方法も時期によって変化していますが、これら痕跡が残るものは、経塚と類似する貴重な副葬品から、有力な百姓や武士団の構成員などの、一定程度の階層の人々であったと思われます。



上左：鏡管  
上右：松樹千鳥鏡  
(荻間神田遺跡)  
下：山吹双鳥鏡  
(島名熊の山遺跡)

## ◆有力な百姓の屋敷地「梶内向山遺跡」

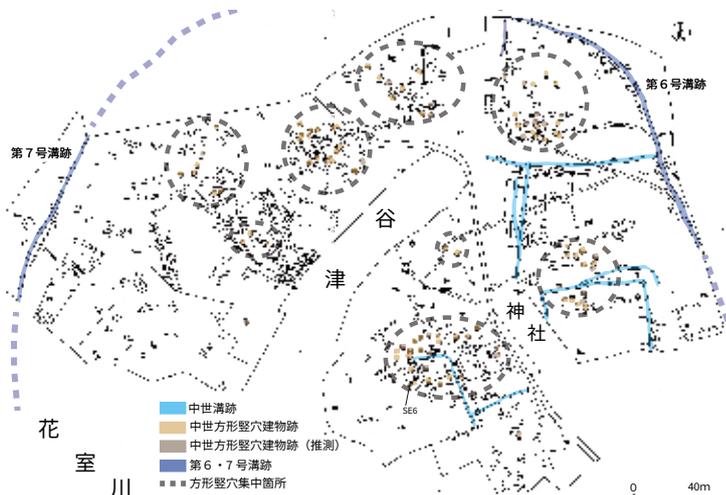
梶内向山遺跡は、小野川左岸、標高17～20mの低位の台地上に位置しており、13世紀後半～14世紀前半頃の屋敷地が見つかります。屋敷地は2区画程の存在が推測され、住居に使用する掘立柱建物と井戸などで構成されていたと思われます。北東側は部分的に幅1～2m、深さ0.8mのL字状の溝(第31号溝)で区画しており、区画内の建物跡は、4時期の変遷が推測されています。Ⅲ期の第3号掘立柱建物跡は、柱の沈下を防ぐ礎盤石を使用した建物跡で、桁行14.7m、梁行8.1mで、面積120m<sup>2</sup>と大きく、武士ではないものの有力な人物の屋敷地と推測されます。



梶内向山遺跡中世屋敷地平面図(1:1,500)  
(『梶内向山遺跡』第199集に一部加筆)

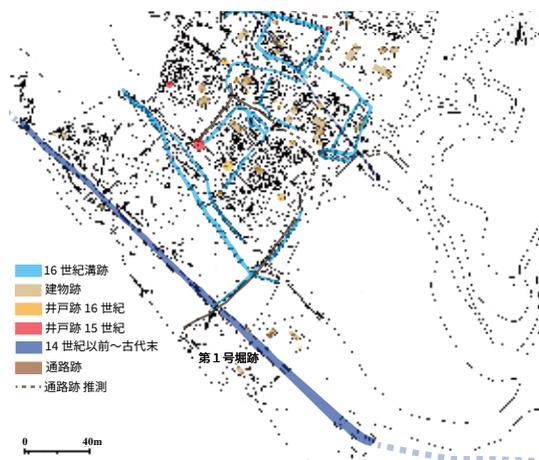
## ◆集落全体を調査した「柴崎遺跡」

柴崎遺跡は、花室川左岸、標高23～26mの低位の台地上に位置しており、13～14世紀前半頃の集落跡が見つかっています。一辺3m程の方形で、作業小屋や倉庫などの機能が想定される方形**中世方形竪穴建物跡**が、谷津を囲むように多数確認されています。掘立柱建物跡もあった可能性はありますが、調査では確認されていません。また、この集落跡を大きく囲む溝跡(第6・7号溝跡)が確認されており、古代の住居跡を壊していることや出土遺物から、中世に掘られたものと思われる。建物や耕地、空閑地を含む村の領域を溝などにより区画したものと思われる。



## ◆上野集落を囲む溝跡を発見「上野古屋敷遺跡」

上野古屋敷遺跡は、現在のつくば市上野集落の南側、標高25～28mの台地上に位置しており、15～16世紀の中世でも後半の集落跡が見つかっています。その集落跡の南東側はずれに、台地を横断し谷津までつなげる、幅2.5～4.0m、深さ0.5～0.8mで断面逆台形の堀跡(第1号堀跡)があります。これは集落跡の少し外側に位置しており、出土遺物から中世後半の集落が機能する頃には、埋まり始めていたと思われる。この堀跡は、台地裾に位置する現集落をはじめ、一定程度の耕作地などを含む、村の領域を区画したものと思われる、中世初期の頃に掘られたと推測されます。



## ◆寺院跡と鑄造の遺構

鎌倉時代になると、鎌倉新仏教の影響もあり、多くの寺院が建立されました。その中には現存するものだけでなく、花室寺畑廃寺のように表採品や伝承、地名などから遺跡として確認されるものもあります。島



名熊の山遺跡にある妙徳寺は、永仁5年(1297)の建立とされ、その東南東160mから鑄造遺構(第681号土坑)と鱗口、大型の連弁等の鑄型が確認されました。大型の鑄造品については、製品を運ぶのではなく、中央の職人が現地に足を運び、現地の職人と力を合わせて製作したとされ、この遺構もその痕跡と考えられます。年代を示す出土品がないため、明確な年代や妙徳寺との関係ははっきりしませんが、その製品の内容から中世のものと考えられます。

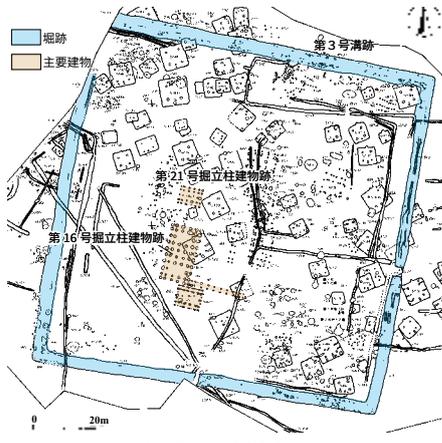
## 5 小田氏の衰退と新たな勢力の進出

鎌倉時代の後半になると、八田知家が築いた小田氏の勢力が、北条氏の進出により次第に削がれていきます。小田一族の田中氏は、弘安8年(1285)に安達泰盛が滅ぼされた霜月騒動で、安達方で失脚して田中荘(つくば市北部～つくばみらい市)を失います。それ以外にも小田氏は、信太荘(土浦市南部～稲敷市東部)や北郡(石岡市西部)なども失いました。この動向と関係する可能性がある、鎌倉時代後半以降に出現する城館跡を紹介します。

## ◆短期での築城と廃絶「島名前野東遺跡」

島名前野東遺跡は、東谷田川の右岸、標高12～19mの台地上に位置しており、13世紀の後葉から14世紀前葉の城館跡が見つかっています。幅3.5～5.5m、深さ1.0～1.7mの堀跡(第3号溝跡)によって一辺約114mの方

形に区画されています。中心の建物跡(第16号掘立柱建物跡)は、桁行18.0m、梁行9.2mで、面積165m<sup>2</sup>の大型のもので、平安時代に貴族の住まいであった寝殿造の廻廊が起源とされる中門廊が付属し、礎盤石も使用した、格が高い建物跡です。この城館跡は、田中荘内に位置することから、霜月騒動により小田氏一族の田中氏に代わり、新しく入部した勢力の城館である可能性が指摘されています。



島名前野東遺跡中世城館平面図  
(1:2,500) (『島名前野東遺跡』第281集に一部加筆)



上：水守遺跡調査地位位置図  
(1:10,000) (『水守遺跡』より)  
下：第3号溝跡(No.2地点)完掘状況  
(『水守遺跡』より)

## ◆有力な新勢力の城館「水守遺跡」

水守遺跡は、桜川右岸、標高28～30mの台地上に位置しており、14世紀を中心に13世紀後半～15世紀頃の遺跡が見つかっています。部分的な確認調査のため、詳細な遺跡の内容は不明ですが、幅2m以上、深さ1.5mの溝跡(第3号溝跡、NO.2地点)や多量のかわれけ、陶磁器の出土状況から、小田氏に匹敵するような有力な勢力の城館跡と集落跡と推測されます。11・12世紀頃には常陸平氏の拠点であった「水漏」(つくば市水守)の地ですが、この時期の遺物は確認されていません。戦国時代には、台地北端に土塁や堀が残る水守城が築かれますが、それ以前から、水上交通で重要な桜川と広大な水田を見下ろす位置に、有力な勢力が本拠を構えていたと思われます。

## おわりに

八田知家は、源頼朝の側近として勢力を蓄え、「常陸国大名」(『吾』)といわれた常陸平氏の本宗多気氏などを失脚させ、常陸国(茨城県)で最大の勢力に成長しました。知家は以後の小田氏発展の礎を築き、小田氏は15代小田氏治まで、常陸国南部で最大の勢力として存在し続けました。知家に関する歴史の痕跡は、小田氏が本拠を構えた小田や、多気氏の本拠であった北条など、筑波山南麓に集中していますが、つくば市には同じ鎌倉時代を生きた多くの人々の生活の痕跡も各地で確認されています。つくば市教育委員会では歴史に名を残した英雄の歴史と共に、つくばに生きた名もなき人々の痕跡も、大切に次世代へ伝えていきたいと思ひます。

### 主要引用・参考文献

- 兩貝昭 1989年「八田知家考-系譜的研究-」『常総の歴史』4
- 石川安司 2008年「瓦・仏像・浄土庭園」『東国武士と中世寺院』高志書院
- 茨城県教育財団 1989年『柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ-1区』第54集
- 茨城県教育財団 1991年『柴崎遺跡Ⅱ区』第63集
- 茨城県教育財団 1992年『柴崎遺跡Ⅲ区』第72集
- 茨城県教育財団 1994年『柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区』第93集
- 茨城県教育財団 1997年『熊の山遺跡』第120集
- 茨城県教育財団 1998年『神田遺跡』第134集
- 茨城県教育財団 2000年『熊の山遺跡』第166集
- 茨城県教育財団 2002年『島名前野東遺跡上巻』第191集
- 茨城県教育財団 2003年『梶内山遺跡』第199集
- 茨城県教育財団 2007年『島名熊の山遺跡』第280集
- 茨城県教育財団 2007年『島名境松遺跡・島名前野東遺跡』第281集
- 茨城県教育財団 2009年『上野古屋敷遺跡3』第324集
- 茨城県教育財団 2010年『上野古屋敷遺跡4』第334集
- 牛久市史編纂委員会 2004年『牛久市史料 中世
- II 記録編』牛久市
- 牛久市史編纂委員会 2004年『牛久市史 原始古代中世』牛久市
- 川村満博 2011年「茨城県内出土の非ロクロ成形かわらけについて」『茨城中世考古学の最前線～編年と基準資料』茨城県考古学協会
- 高橋修 2009年「『常陸守護』八田氏再考-地域間交流と領主的秩序の形成-」『茨城の歴史的環境と地域形成』地方史研究会
- 高橋修 2022年「鎌倉殿の13人?常陸国守護!八田知家とは何者か?」茨城大学図書館の土曜アカデミーレジュメ
- 中世瓦研究会 1998年『第5回 中世瓦研究会-茨城資料編-』
- つくば市教育委員会 1993年『三村山極楽寺遺跡群-確認調査報告書-』
- つくば市教育委員会 1999年『史跡小田城跡 第29・31次調査(本丸跡確認調査Ⅰ)概要報告』
- つくば市教育委員会 2002年『史跡小田城跡 第40次調査(周辺曲輪跡Ⅰ)概要報告』
- つくば市教育委員会 2015年『つくば市内遺跡-平成26年度発掘調査報告-』
- 筑波町教育委員会 1981年『日向遺跡』
- 筑波町史編纂委員会 1986年『筑波町史 史料集 第10篇』つくば市
- 筑波町史編纂委員会 1989年『筑波町史 上巻』つくば市
- 土浦市立博物館 2021年『土浦市立博物館第42回特別展 東城寺と「山ノ荘」 古代からのタイムカプセル、未来へ』
- 土浦市立博物館 2022年『土浦市立博物館第43回特別展 八田知家と名門常陸小田氏-鎌倉殿御家人に始まる武家の歴史-』
- 寺島誠齋 1994年『土浦史備考』土浦市教育委員会
- 野口実 2015年「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」『東国武士と京都』同成社
- 茂木文書研究会 2019年『ふみの森もてぎ開館3周年記念特別展 茂木文書の世界』茂木町まちなか文化交流館ふみの森もてぎ
- 桃崎祐輔 2003年「常陸三村山採集の永福寺瓦と「極楽寺」銘梵鐘 三村山極楽寺の創建と八田知家をめぐる宗教的環境」『歴史人類』第31号
- 有限会社毛野考古学研究所ほか 2018年『水守遺跡-ソーラーシェアリング開発事業に伴う発掘調査報告-』